

OTSU CITY MUSEUM OF HISTORY

大津 歴博 だより

大津観光十社寺・湖信会結成50周年記念
第50回企画展

2009
No.77

湖都大津 社寺の名宝

平成21年10月10日(土)～11月23日(月・祝)



木造持国天立像(木造二天立像2軀のうち) 立木山安養寺蔵



大津市歴史博物館

湖都大津 社寺の名宝

湖都大津は、歴史あるまちです。大津には古い神社仏閣が実に多く所在しています。古代には皇族や貴族が遊山に訪れ、近世は近江名所図会のような案内が作られるなど、大津の社寺を観光の眼から見ることは古くから行なわれていました。

戦後、関西の六市（大阪市・大津市・京都市・神戸市・津市・奈良市）が合同で、各市の持つ観光資源の活用と観光客誘致と地域振興を目的として「近畿観光六市連絡会」が発足しました。これをうけて大津市観光課が中心となって、市内の有名観光社寺である延暦寺・園城寺・石山寺・近江神宮・日吉大社の賛同を得て、一九四七年の秋に「二社三寺」連絡協議会が設立されました。

さらに一九五八年には、西教寺と岩間山正法寺が加わり、加盟社寺が七団体に増えたため体制を新たにし、「湖信会」が結成されました。神社と寺院が観光面で団結して協力することは当時としては珍しい試みでしたが、その活動により今日の大津観光の礎が築かれました。その後、大津市の合併などもあり、満月寺（浮御堂）や建部大社、そして立木山安養寺（立木観音）が加わり、今では加盟寺院が十社寺となりました。

その湖信会が創られて昨年で五十年を迎え、それを記念して企画されたのが本展です。その半世紀にわたる大津観光ならびに文化財保護の活動を振り返り、この観光十社寺を中心に大津市内に伝来する仏像や神像などの名宝を展示します。特に博物館などに寄託しているため普段観光として訪れてもなかなか拝観出来ない名宝の里帰り展示も計

画中です。そして実際の展覧会においては、仏像や神像の世界を、尊名ごとに順番に分かりやすく、イラストを含めて説明的に展示する予定です。

本展において各社寺の宝物に触れ、理解を深めたうえで、実際に社寺を訪れて現地の雰囲気味わうという、霊場と博物館の双方を体感することで、大津の豊かな歴史文化に触れていただけましたら幸いです。

展示構成

一、尊像別でみる大津の仏像・神像

0. 釈迦・舎利

1. 如来

- ① 釈迦如来、② 葉師如来、③ 阿弥陀如来、④ 大日如来、⑤ 弥勒如来

II. 菩薩

- ① 聖観音、② 十一面観音、③ 千手観音、④ 如意輪観音、⑤ 馬頭観音、⑥ 弥勒、⑦ 文殊、⑧ 普賢、⑨ 虚空蔵、⑩ 日光・月光、⑪ 地藏 など

III. 明王

- ① 不動、不動三尊、② 五大明王、③ 愛染明王 など

IV. 天部

- ① 梵天・帝釈天、② 四天王、③ 毘沙門天・兜跋毘沙門天、④ 吉祥天、⑤ 大黒天、⑥ 鬼子母神、⑦ 十二神将、⑧ 婆藪仙、⑨ 蔵王権現、⑩ 金剛力士、⑪ 閻魔天・閻魔王、⑫ 弁財天、⑬ 黄金剛童子、⑭ 尊星王、⑮ 二十八部衆 など

V. 神像

- ①男神、②女神、③新羅明神、④護法善神、⑤山王権現、⑥赤山明神、⑦熊野権現、⑧獅子・狛犬、⑨随人 など

二、「湖信会」十社寺の案内

- ・その他各社寺の宝物
- ・案内パネル、境内図と地図
- ・湖信会関連資料

会 期 十月十日(土)、十一月二十三日(月・祝)

開館時間 午前九時～午後五時(入場は午後四時三十分まで)

休館日 十月十三日・十九日・二十六日、十一月二日・四日・

九日・十六日



重要文化財 木造聖観音坐像 満月寺(浮御堂)蔵

主 催

大津市・大津市教育委員会・大津市歴史博物館・社団法人びわ湖大津観光協会・湖信会(満月寺「浮御堂」・

西教寺・比叡山延暦寺・日吉大社・近江神宮・園城寺

「三井寺」・岩間山正法寺「岩間寺」・石山寺・建部大社・

立木山安養寺「立木観音」、以上の十社寺)・京都新聞社

BBCびわ湖放送・NHK大津放送局

後 援

歴史博物館企画展示室A

観 覧 料

大人八〇〇円(六四〇円)、高大生四〇〇円(三三〇円)、

小中生二〇〇円(一六〇円) (一)内は前売、十五名以

上の団体、大津市在住の六十五歳以上の方、大津市在住

の障害者の方の割引料金

関 連 講 座

(タイトルなどは変更する場合があります)

十月十七日(土) 「日本の仏像の先祖調べ」

肥塚隆氏(大阪大学名誉教授)

十一月七日(土) 「大津の寺院建築とその魅力」

富島義幸氏(滋賀県立大学准教授)

十一月十四日(土) 「神と仏のはざま」

赤川一博氏(奈良県立美術館学芸課長)

十一月二十二日(土) 「大津社寺調査の思い出」

宮本忠雄(元滋賀県教育委員会)

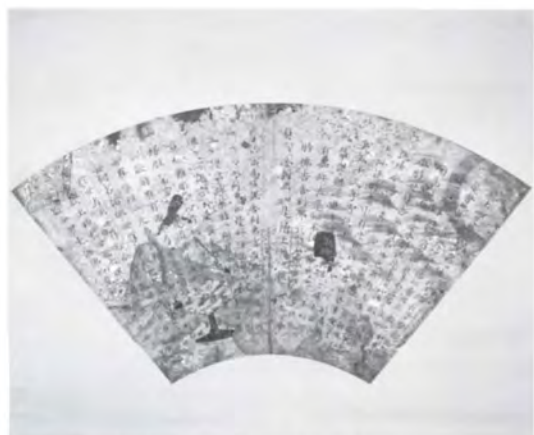
文化財保護課美術工芸担当)



木造三面大黒天立像 立木山安養寺蔵



大津市指定文化財 金銅千手観音立像 近松寺蔵



重要文化財 扇面法華経 西教寺蔵



重要文化財 木造訶梨帝母倚像 園城寺蔵

ミニ企画展

「膳所藩主のブレン・皆川淇園の文人画」
きえん

■平成21年10月27日(火)～11月29日(日)

膳所藩主・本多康完（一七七八）に招かれ、藩の教学の振興に尽力した京都の大儒学者、皆川淇園（一七三五～一八〇七）は、膳所藩校・遵義堂（しんぎどう）の設立推進者です。淇園は藩主にとつての、藩政の良き諮問相手であつたばかりでなく、藩士の学問水準向上や、子弟教育に多大な貢献があり、彼の逝去にあつては、藩主・本多康禎（しんねい）自らが、淇園の墓碑の碑文清書に、筆を揮いました。

現代では、彼の事蹟が取り上げられることは少なく、まして、彼の画事について知る人は殆どいません。しかし、彼の描く文人画は生前、高い評価を得ていました。また、円山応挙や長沢芦雪をはじめとする、当代一流の絵師たちをはじめ、文化人との多彩な交流でも知られた人物でした。本展では、当時のプロの画人をしのぐ作画を手がけた、知られざる淇園の文人画の世界を紹介します。



皆川淇園 墨蘭図 大津・個人蔵(右)
皆川淇園 月下溪流群鴉図 大津・個人蔵(左)

ミニ企画展

寅年の絵はがき

■平成21年12月1日(火)～平成22年1月17日(日)

今春に開催した「道楽絵はがき」展の展示資料（米谷コレクシヨン）の中から、来年の干支である「寅」の年賀状を中心に展示します。ちなみに、左の年賀状は一休とんち話の見立て。衝立の虎を出せという無理難題に、一休さんがとんちで返すお話をモチーフにしています。虎を画面に描かないのが粋なところでしょうか。このように、大正・昭和のコレクターたちが、年賀状交換会のために知恵を絞った木版年賀状の数々から、当時の趣味家たちの洒落や見立ての世界を存分にお楽しみください。ご覧いただければ、みなさんの年賀状作りにきつと刺激を与えてくれることでしょう。



一休とんち話見立 福井貫進 大正15年(1926)

皆川淇園の発掘報告書でもある龍骨図

現代は、自然現象や生物、環境の問題をはじめ、身近な自然科学に関して専門の研究者のコメントが、日常的にメディアで見聞できる便利な社会です。しかし、二〇〇年余り以前の江戸中後期は、自然科学者である蘭学者は少数派であり、江戸・京都・大坂・長崎に集中していました。よって、地方で未知の現象や発見に出くわした場合、知見を求められるのは儒学者でした。一八〇四年、膳所藩領の伊香立南庄村に走る古琵琶湖層群の堅田累層で新田の開墾をしていた農民が、未知の化石を掘り当てた際も、相談を受けたのは「膳所侯儒者」の皆川淇園でした。その化石の写生画「龍骨図」が、発掘者の末裔の家に伝存しています。本作は、写生画法に長じた円山応挙の弟子、上田耕夫（一七五八―一八三一）に、淇園が博物図譜としての図巻を描かせ、関係者に聞き取り調査した内容を識語（漢文）として淇園自身が図巻に清書した発掘報告書作品の副本です。ちなみに、その化石は、五〇、四〇万年前に生息していたトウヨウゾウ（現代のゾウとは異なるステゴドン類に属する）として現代では同定されています。以下、識語を現代語訳しました。

釈文：文化元年（一八〇四）、冬十一月八日。近江志賀郡南庄村民、その村、西の小さな岡の上に当って地を開墾したところ、龍骨を得る。その岡の東および南北はみな田であり、西は、山岡において連なり、その末は不動の山岡を為す。高さは、地面より三丈余りばかり。村民これをうがち、深さ八尺（二・五M）、その首を、岡の頂きにおいて得た。そこから、少し下った西北の方向では、東に頭部、西に尾部、全長はおよそ三丈か。いくつかが、二つの岡にわたっていた。その土色は、骨の西北には青色多く、東南は黄赤色気味であった。また、砂利や土の塊は無く、その外面は木葉形をなしていたのがこれである。そして、その傍ら近くの土中は、ことにまた、穴を掘った住居の跡があったところとも見えなかった。はじめ、その民がここを切り開いて、まず、その頭骨を見て、もって石となし、粗（すき）をぶつけた。かえりみると、破壊されて、三つの破片になっ

ていた。その髄骨・脊稜は、また、皆すでに、朽ちてしまっており、石のごとくになっていたのは、わずか、ひとつふたつの腕、および手足・掌の骨、また、わずかに、その筋であった。どこの骨かは知るべからずして、また、いくつかがの塊があった。そして、蛙蛭（どぶがいがい・しじみ）の化石に似たものが、すこぶる多かった。おおよそ、骨の色は、総じて皆、赤土の類であり、帯緒から紫色の間、鉄鏽（てつさび）色のごときであった。その他は、図の傍らに詳しく付記する。村民は、既に、それをもって、異物を復原し、持参してこれを献上した。藩主は、家臣にそれを観察するよう命じ、かつ、識者を召して、これを同定した。皆いわく、龍骨なり。これにおいて、ついに、漢の武井渠の故事に倣い、祠を、その地に立て、また、伏龍と命名した。そして、その村民、市郎兵衛と称す者に、龍の姓を賜った。その地、もとは奥谷という地名にて、今はまた、改めていわく龍谷という。その翌年春正月、藩主が予（淇園）に、龍骨詩を作るを求め、かつ、今、藩士が来訪して、その図を写生することを発案したので、二月に、予が絵師・上田耕夫に、その骨を与えて、膳所で間近に観察したように、これを写生させた。そして、耕夫は帰宅してのち、図を完成させた。藩主は、私に、再び、図の傍らに付記することを要請した。かつ、その事の始まりから終りについて、図巻の巻首に記録した。右、書龍骨図巻首に応ずる。（以下三行、淇園への依頼の経緯。紙数の都合で省略。）

文化二年（一八〇五）乙丑季冬十九日平安皆川恩書

（横谷 賢一郎）

此化石中予十一月八日近江志賀郡南庄村民
西の小さな岡の上に當りて地を開墾し北南
及び東西はみな田なり西は山岡に連なり
其末は不動の山岡を為す高さは地面より
三丈余りばかり村民これをうがち深さ八
尺（二・五M）その首を岡の頂きにおい
て得たそこから少し下った西北の方向
では東に頭部西に尾部全長はおよそ三
丈かいくつかが二つの岡にわたってい
たその土色は骨の西北には青色多く東
南は黄赤色気味であったまた砂利や土
の塊は無くその外面は木葉形をなしてい
たのがこれであるそしてその傍ら近い
土中はことにまた穴を掘った住居の跡
があったところとも見えなかったはじめ
その民がここを切り開いてまずその頭
骨を見てもって石となし粗（すき）をぶ
つけたかえりみると破壊されて三つの破
片になつて



龍骨図 上田耕夫画・皆川淇園識 龍正義家藏

大津歴博だより No.77
平成21年9月20日

大津市歴史博物館
〒520-0037 大津市御陵町2-2 ☎(077)521-2100
ホームページ <http://www.rekihaku.otsu.shiga.jp>